



アメリカの現代作家John Knowlesの小説とその主人公

著者	松山 信直
雑誌名	主流
号	35
ページ	18-36
発行年	1973-09-30
権利	同志社大学英文学会
URL	http://doi.org/10.14988/pa.2017.0000014898

アメリカの現代作家 John Knowles の 小説とその主人公

松 山 信 直

John Knowles はこれまでに、大体 16 歳から 24 歳位までの青年を主人公とする作品を書いてきた。1926 年生れだから必ずしももう若くはないが、作品はあまり多くなく、今までのところ小説 4 冊 (*A Separate Peace*, 1960; *Morning in Antibes*, 1962; *Indian Summer*, 1966; *The Paragon*, 1971), 旅行記 (*Double Vision*, 1964), 及び短篇集 (*Phineas: Six Stories*, 1969) を発表しただけである。最初の小説 *A Separate Peace* はかなり増刷されて読まれたロングセラーだし、日本語にも翻訳されているが、Knowles はまだ日本ではほとんど知られていないと言ってもよく、アメリカにおいても確立した評価を得ているとは言いがたい。1967 年に J. L. McDonald がそれまでに発表された作品を論じて、彼を “an enormously promising novelist”²⁾ だと言った言葉は *The Paragon* によってその適切さが立証されたと私には思えるのだが、二・三の著名雑誌の書評で好評を得たにも拘らず、この作品も Knowles の世評を高めるまでにはいたらなかった。その理由には読書界と作品そのものの両面からいくつかのことが考えられるが、ここではその追究は一まずおくとして、*The Paragon* から入って Knowles の小説の性格とその主人公たちの特色を眺めてみることにしよう。

The Paragon は Lou Colfax という、8ヶ月海兵隊にいて Yale 大学に戻った 21 歳の青年の物語である。この小説について “A beautiful,

funny, moving novel”⁹ と言った Webster Schott の言葉は正しい。酔っぱらった学生が寮の部屋の中までポロ用の馬にのって帰ってくることや、Lou がかつての恋人に生れた赤ん坊は自分の子供だと信じ、自分で育てようと赤ん坊を盗み出して寮に泊めることなど、ユーモラスなシーンがいくつもある。

作品はたしかに主人公 Lou のコミカルな登場をもってはじまる。Lou は道で出会った二人の学生に荷物の入ったダンボール箱をもたせ、上から下まで黒づくめの服装をして寮に入ってくる。ルームメートの Gordon がシャワーをあびている間に部屋に入りこんだ Lou は、荷物を運んでくれた学生に一杯のんでいけとすすめるが、自分が酒を持っている訳ではなく、Gordon のポーランド製ウォッカを探してきてのませる。ところが自分は奇数月は酒をのまないのだけと口をつけない。その間にダンボール箱をあけて荷物をとり出すが、最初に出てきたのは真赤なソ連の旗と、海兵隊にいた間にもらったという二千通の手紙の束だった。

シャワー室から出てきた Gordon は、いつの間にか三人の見知らぬ男が部屋に入りこんで自分のウォッカを勝手にのんでいるのみならず、その一人は黒づくめの服装で真赤なソ連の旗をもっているのを見て驚く。Gordon は、灰色のフランネルのズボンにツイードの上衣、カンミアのセーターに縞ネクタイと英国製の靴、New York にいった時には高級社交クラブに出入りができ、スクオシとスキーができて小金をもっている、こんな平均的ハイカラさと豊かさの条件をそなえたルームメートを期待していたのだが、そんな彼の眼には、Lou は全く奇矯な人間と映った。あきれている Gordon を残して、Lou は荷物を運んでくれた学生をさそってビールを飲みに行く。Lou は奇数月はビールを飲むのだという。ところが、ビール代を払う段になって Lou には7セントしかないことがわかり、おごってもらった二人がビール代を払うことになる。数日たって、そのうちの一人で陸上選手の学生が部屋に帰ってみると、酸素ボンベと吸入マスクが

贈り物用の青リボンをつけてとどいていた。また、もう一人の部屋には、当時まだめづらしかったモビールが天井からぶら下っていた。二つながら明らかに Lou からのビール代のお返しだった。

われわれが見る Lou の登場はこのようなものである。一見、Lou は変っており、その奇矯さからユーモアが生まれてはいる。しかし、Lou は陽気で快活で茶目気があるから平均的服装や行動から逸脱したというのではない。Lou の行為には、一面では、友人の注目をひき、並の人間でないことを示そうとする意図はたしかにある。この意図が見えすいているだけに、彼の行為はキザにみえる。ことに、Yale 大学に巨額の寄付をした大会社の御曹子で大学の体制的・社会的への順応を代表するルームメートの Gordon にとっては、初対面以来、Lou の変った行為が気に入らない。彼はさっそくルームメートをかえてくれるように申し出さえもする。また、Lou が自己を主張すればする程他の寮生たちの軽蔑と嘲笑をも招き、笑いのものにされる破目に陥る。だが実は、彼には自己を誇示するようなゆとりはなかったのであって、失敗者になりたくないという必死のあがきがあっただけだった。

いずれにしても、*The Paragon* は Lou をこのような形で登場させ、二つの流れに沿って物語を展開する。その一つはこの Lou が今後大学でどのように生活していくかという時間の経過を追う前向きの流れであり、もう一つは、折にふれて時間をさかのぼっていく流れである。作者は Lou の過去や問題点を *flush back* の手法で時々とり出し、彼の奇矯さ、反逆的・自己破壊的とも思える行為の根源にあるものを次々と明らかにする。このようにして明らかになる Lou の姿は、まさしく *anti-hero* のそれだった。

Lou は鋭い感受性を持ち、競走馬にも似た緊張した神経の持主で、さらに、自意識の強烈な、誇りの高い完全主義者である故に、常に外界との軋轢を経験する。彼にとって、ニューイングランドの没落した旧家の出身で

あることは決定的な意味を持っていた。というのは、現在のこの一家のメンバーは変わり者の失敗者たちばかりで、Lou は自分もその一人になるのではないかという危惧の気持ちに絶えずとりつかれていたのであった。高校時代に私立、公立と五つも学校を転々としたのも、常に緊張した神経と家の重みの不安感とに根ざした情緒的不安定さの故だったといってもよい。その彼が Yale 大学に入れたのは、優秀な知的能力と幅広い興味を持っていたためだった。

大学で Lou は演劇専攻のイギリス女性 Charlotte と恋におちた。イギリスの伝統の桎梏から逃れてきた Charlotte と Lou とは、互に支えあうことによって自我の安らぐ世界を築こうとするが、Charlotte が子供を求めたのに Lou が応じなかったために二人の間は冷くなり、些細なことではいさかいを起して Lou は Charlotte と別れてしまった。そこで Lou は大学をやめて海兵隊に入った。かねて父からどうしようもなくなった時は海兵隊に入れと言われていたからである。ところが、海兵隊でいくらしぼられても、Lou は海兵隊が求める兵隊になることはできなかった。8ヶ月たって、彼は海兵隊から追い出されてしまった。

われわれが *The Paragon* の冒頭でみる Lou は、このように、自我の負担、家の重み、恋愛の破綻、海兵隊による拒否、といった状況の積み重ねを経験してきたのであって、彼の一目奇矯ともみえた行為は、自己を誇示するようなゆとりから生まれたのではなく、失敗者になりたくない、孤独な破壊者になりたくない、という彼の意識内の切実なあがきのあらわれだったのである。Lou とは、優秀な頭脳と鋭い感受性を持ちながら、いや、持ちながらというよりは持っているが故に、周囲の世界と相容れず、敗北者の状態に追いこまれた人間である。彼が大学に戻ったことには、自己確立の最後の機会だという敲しい意味があったのである。

必死のあがきが裏目に出て、Lou はルームメートの Gordon との不和から寮生たちの笑いに陥し入れられそうな危機を迎えるが、それを南

米出身の黒人でコミュニスト的な Clement や, Gordon の継母 Norma, その他二・三の彼を理解してくれる学友たちの友情を得て切り抜け, 何とか大学生活に再びふみ出す。とくに, Norma が Lou の自己に対する自信を回復してくれたことは大きかった。しかし, 間もなく Lou は, 演出家と結婚した Charlotte が子供を生んでいたことを知り, その子供は自分の子供だと信じこむ。そして, その子供を自分が育てることによって, 孤独な世界から抜け出て, 連帯感のある「われわれ」の世界に生きることができはしないかと考える。そこでこの赤ん坊を Charlotte の部屋から連れだし, ニューヨークに住む Norma にあずけて養育をたのもうとするが, Norma は Lou にこの子供の父親になる資格はないと言い, 子供を Charlotte に返させる。つまり, Charlotte が子供を求めた時に Lou が応じなかったことによって, Lou は子供の父としての権利を主張する資格を失い, 彼の自己実現を支えてくれる Charlotte その人を失ったのみならず, 彼女との間に得られたかもしれない幸福も, また, 二度と再び同じような幸福を手に入れる可能性も失ったのである。Lou に願いを拒まれたために, Charlotte は別の人間へと変らざるを得なかったのである。それと同じく, Lou もまた別の生き方をせざるを得ないのだ。そのことを Lou はやっと悟ったのだった。「あの拒否故におれは残りの一生の間, “partial person” に過ぎないのだ」と Lou は考える。だが, 自分がいわゆる欠陥人間であっても, 何か人類に貢献できることがあるのではないかと Lou は考える。そして, 「一生を通じて不完全な人間たらざるを得ない, という自覚を埋め合わせるために立派な仕事をした科学者や芸術家や革新家が沢山いるのではないか。それが多分これだ。それが俺なんだ」との認識を得て, まだまだ未知の世界である海中微生物や海洋の研究に自分の生きる道を見出す。

この *The Paragon* の物語が語っているように, 表題の Paragon が示している現代の模範的人物は, 学力優等の人格者で輝かしい過去と無限の

可能性にあふれた未来をもつ人間ではない。現代の模範青年はそんな古めかしい hero ではなくて、家の重荷を背負い、強烈な自我に根ざした誤を犯して傷つき、孤独で、不完全でしかあり得ない人間、典型的な anti-hero である。彼が模範だと言われる所以は、anti-hero 的状況の積み重ねに流されて自己を見失うようなことがない、という一点につきる。Lou は自己の不完全さを認識し、その認識を起点として自信をもって研究に向おうとするのである。

Knowles の小説はどれをとっても、このような anti-hero 的状況もしくは条件を自己の原点として自己確立をめざす青年を扱っている。それぞれの青年に与えられた状況にはかなりの差があるにしても、処女作 *A Separate Peace* の Gene も Phineas も、*Morning in Antibes* の Nick も、*Indian Summer* の主人公 Cleet も、また、二・三の短篇の主人公も、すべて上記の意味での anti-hero としての模範青年である。

ところで、この *The Paragon* は、物語の時間経過を前向きにたどる見方からすれば風俗小説である。大学に戻った Lou の生き方を描きながら、大学での彼の経験という形で学生のさまざまな生態が風俗画的に扱われているからである。Knowles は Yale 大学の出身で、writer-in-residence として Princeton 大学や North Carolina 大学などの学生に接したこともあって、学生中心の学校社会はかなりよく知っている。*The Paragon* には、当然のことながら、大学風景として講義やフラタニティのクラブやフットボール試合などがとり入れられているが、さらに、学生に人気のある劇作家の“Sage”のもとに集まるパーティーや、左翼的な John Reed Club、サイケデリックな美術展、マリファナや阿片をひたしたキープを喫う会など、大学生生活のアングラ的裏面も描かれているし、また、Yale 大学はウォール街とワシントンの最も反動的な面に直結していて、カリキュラムは資本主義のドグマでもって学生を洗脳している、と主張する学生もいるし、

Lou のルームメートの Gordon のように実業家の息子でハイカラさを身上とする学生も登場する。

あえてこの多元的な価値観が雑居している風俗画に難点を見出すとすれば、それは、学生の生態が余りにも今日的で、作品の舞台になっている1952年の朝鮮動乱当時の、自由主義諸国と共産圏諸国の力による対決ムードという歴史的意識が稀薄なことだろう。しかし Knowles はこれまでの他の作品においては、歴史的状況を風俗画に描きこむことにはかなり成功していた。たとえば、*A Separate Peace* は第二次世界大戦下の Prep School を舞台にしているが、この学校でも18歳の徴兵に間にあうように夏休に授業が繰りあげて行なわれ、戦争がさまざまな面で学生たちにおおい被さってくる様子が描かれている。主人公たちの一年上の上級生には厳しい体育が課され、主人公たちも兵員輸送列車のために雪かきに動員されるし、やがて軍隊に志願する問題ももち上ってくる。*A Separate Peace* は、このような背景のもとで語り手 Gene とクラスの人気者 Phineas の間の人間関係の物語を展開する。Gene は Phineas に対する自分の理解の浅さ、誤解が、戦争と同じく「人間の心の中にある何か無知なもの」から生まれたのだと知り、憎しみを知らない Phineas が作った戦争無視の平和なスポーツの世界に生きようとする。それはまさに戦時下における“separate peace”に他ならなかった。物語は15年後の Gene の視点から語られているが、Knowles は歴史的状況をふまえた Prep School の風俗画の中で、憎しみから生まれる敵は自分の心の中にいることを知った青年の成長を語るのである。

第二作の *Morning in Antibes* は、フランスのリビエラ海岸のコンストニースの中間にあるアンチーブに集った人々を描いている。折しもアルジェリアで暴動が起っていて、この作品においても戦争が人々の生きかたにかぶさってくる。アルジェリア人の過激派はこの土地でもガソリン・スタンドを爆破し、警官や軍隊は厳しい警戒網をしいている。そしてこの危機を

のりきるためにドゴールの出現を待つ声が高まってくる。アンチーブには、こういうフランスの政治情勢を全く理解しないアメリカの富豪のドラ息子も来ているし、政治に無関心な海辺の遊び人や女達もいる。また、金ほしさに父のレストランの金を盗んで逮捕される青年や、頹廢したファシストの引退者もいる。地中海の彼岸に起っている騒乱と保養地としての享楽が入り乱れたアンチーブの情勢は、この土地に来た主人公たちの精神的状況にかぶさってくる。Nick は結婚生活に失望し、心の傷をいやすためにこのアンチーブにやってきた。彼の妻 Liliane も Nick のあとを追ってやってきて、ファシストの Marc De la Croie とねんごろになる。一方、アルジェリア人であるためにパリを追われ、過激派からは協力を迫られて、官憲と過激派の板挟みになっている Jeannot という青年が二人と知りあう。結局、Nick と Liliane は Jeannot との交友によってトゲトゲしい感情を和らげ、Liliane が結婚しようとしたファシストほど自分達が墮落しておらず、二人にはまだ再出発の余地があくことを知って自信を見出し、二人でパリに戻って出直してみることにする。一方 Jeannot は、アルジェリアで村長をしていた父がフランス軍に殺され、村人たちが自分を必要としているのを知って、アルジェリアの動乱にとびこんでいく。彼等はいずれも、アンチーブの享楽と頹廢の生活を知ってそれぞれ自分のとるべき道を見出すことになる。ドゴール政権誕生前の政治情勢を織込んでリビエラ海岸の風俗をかなり詳細に描いている点で、この作品もまた風俗小説的な作品である。

同様の傾向は次の小説 *Indian Summer* にも認められる。この作品に描かれる富豪の Reardon 家がパーティを催すシーンは、W. D. Howells の *The Rise of Silas Lapham* の Corey 家が催すパーティや、Fitzgerald の *Gatsby* のパーティなどと同じく、風俗習慣の描出が特定の社会集団の価値観を浮き彫りにする好個の例であろう。風俗とは、かつて Lionel Trilling が述べた言葉を使えば “a culture’s hum and buzz of implica-

tion”であって，“that part of a culture which is made up of half-uttered or unuttered or unutterable expressions of value.”⁷⁾ともいわれている。Knowles はどの作品においても、かなり克明に風俗を描き出すことによって一つの文化のかくれた意味のひびきを表現してきた訳で、風俗の描出によって、その風俗を持つ社会の価値観を間接的に批判してきたともいえる。風俗の描出が立派な社会批評・文化批評となることは、今さら Henry James や Fitzgerald を例にとるまでもないだろう。事実 Knowles の作品は James や Fitzgerald の作品に比較されたこともあった。⁸⁾

しかしながら、Knowles の作品は、一つの文化あるいは特定社会を、その風俗習慣を中心に万華鏡的に描くことそのことに窮極の目的をおいたのではなかった。もし風俗小説を「特定の時と場所における特定の社会集団の風俗、社会的慣習、習俗、因襲、伝統、しきたり等が作中人物の生活に支配的役割を果し、彼等の思想と行為を規制し、彼等が従事する行為に対する決定的素因となるような小説」⁹⁾と定義することができるならば、Knowles の小説は必ずしも風俗小説とは言いきれない。先に *The Paragon* に関して述べたように、作中で学生の生態がかなり克明に描かれはするものの、Knowles の関心の焦点は anti-hero としての模範青年におかれているからである。Lou がそうであるように、Knowles の主人公たちは、風俗描写によって明らかにされる自分たちがおかれている特定社会の価値観に対して、しばられるよりはむしろ拒む態度をとるのである。Gene と Phineas は戦時体制に入った Prep School の中で戦争に背を向けた訳だし、Nick も Liliane も Jeannot も頹廢と享樂のアンチーブには留らない。あとでもう少し詳しくふれるが、Cleat も自分の働く Reardon 家を去ることになるし、*The Paragon* の Lou ですらも Yale の体制的な面にも、アングラ的な側面にもめりこまない。要するに、Knowles はかなり克明な風俗描写を展開しはするが、その風俗が支配する特定社会に

において、主人公がどのようにその社会に対処して自己の進むべき道を見出すかという青年の自己確立、開眼に作品のポイントをおくのである。

Knowles の姿勢をこのように考えてみると、彼のあまりに多くない作品の中でも、*The Paragon* を含めた Wetherford 物語とでも呼べそうな作品群は特に注目に値する。Wetherford は Connecticut 州 Hartford の近辺に設定した架空の街で、目下のところ、*The Paragon* とその前の *Indian Summer*、および一・二の短篇に関係しているだけである。果してこの街が Faulkner 文学のローカルとなった Jefferson のようになっていくかどうかは全く予測できない。というのは、まだこの街に住んでいる二・三の家が扱われただけで、街そのものはあまり描かれておらず、この二・三の家も互に何の関係もないからである。Knowles は大学卒業後 Hartford の *Courant* という新聞の記者を二年ほどやったことがあって、その頃の見聞をもとにしてこの Wetherford を創ったと思われる。だがそれにしてもこの街に住む家を扱った作品には、風俗描写的に扱われる特定の家という社会とそれに対立する anti-hero の設定という点で、著しい共通点がある。それは、一言でいえば、主人公が家長もしくは家の重荷から自己をとき放って一人立ちすることである。上に一言ふれた青年の自己確立に、ニューイングランドの家の重みがからんでいるといってもよい。

Wetherford は 1966 年出版の *Indian Summer* においてはじめてあらわれた。主人公 Cleet が働く Reardon 家はアイルランド系のカトリック教徒で、意志力と仕事の積み重ねで中流階級から富豪にのし上がった新興の New England Merchant である。この家は Wetherford に居を構え、双発の B-18 という機種の家専用機の他にもう一台飛行機をもっている。当主の Hugh はチリーにとんだかと思うと次は南アフリカに出張する忙しさである。一家はビクトリア朝風の家を買いこんで増築し、プールもあればスチームバス付のジムもあり、専属のトレーナーをかかえた豪華な生活

を送っている。

Wetherford の Reardon 家は金の力で山の頂きをきわめた富豪であって、今やのこされているのは「神格化」される最高の頂きだけだといわれている。彼等は金の力にまかせて自分達の好むままに生きてきた。自分達の好む人々をパーティによび、邸やプールを開放するし、父親と親しかったというので Cleet とその弟 Charlie の面倒もみてやった。さらに、若主人 Neal の妻 Georgia の妹や両親の面倒もみてやろうとする。しかし、この一家の好意、善意は自分たちに快い雰囲気を作ろうとするだけであって、彼等はあくまでも自己中心的だった。時は第二次世界大戦直後のことで、陸軍航空隊を除隊してアラスカへ貨物を運ぶ航空会社の設立を夢んでいた Cleet を家につれもどして働かせたのも、若主人 Neal にとって幼な友達の Cleet のような単純で活動的でエネルギーな人間が傍にいる必要があったからである。Hugh は Cleet を Neal の傍に留めておくために、Cleet をつれもどした時の自家用機の事故をいかにも重大事であるかのように印象づけてパイロットを解雇するし、Cleet が計画していたアラスカ航空貨物会社へ出資しないことをきめておきながら Cleet にはその旨を伝えない。

要するに「彼等は自分たち自身の目的のために、巨大な規模で情熱・偽瞞・寛大・わいろ・忠節心・野心・慈善・恣意を運用した¹⁰」のである。いわば自己中心的な無責任さがこの一家を支配していたといってもよい。

この意味において、Reardon 家の人々は、*The Great Gatsby* の Buchanan 夫妻に通じる。金持について Fitzgerald が Hemingway に向かって言った “The very rich are different from you and me.” という言葉は、Lionel Trilling が解説したように、ある限度を越すと金の量はパーソナリティーの質に転化することを指摘したものである。Reardon 家の人々はまさしく富豪である故のパーソナリティーの歪みをみせ、内部崩壊の徴候を見せている。さらに若主人の Neal には人生の挑戦に対する臆病

さ、恐怖があり、彼の妻 Georgia は流産したため二度と子供を生めなくなるかもしれないという。

Reardon 家はこのような自己中心性、偽善、臆病、不毛を性格としてもっているが、Cleet はこの Reardon 家の被護を受けて経済的に安定した生活を送ることに対して、烈しく強く反撥する。たしかに Cleet はインディアンの血を4分の1ひいた人間らしく、エネルギーではあるのだが余りにも本能的、衝動的で、複雑な社会機構を生き抜く知的能力に欠けている。だが彼は Reardon 家での生活は本当に人生を生きたことにはならないことに気付く。今のうちに自己のすべてを投げこんで生きなければ、時機を失うことになる。そこで Cleet は Reardon 家を去って自分一人で生きようとするのである。

ここには、風俗画的に描き出された New England Merchant の富豪の生き方と、生きる実感を求める自由を得ようとする Cleet の対照が鮮かにとらえられている。Cleet は「タンクに立向っていく美しい甲冑をきた戦士」のごとく、「全き人間 (a full human being)」¹³になることを求めてカンサスに向けて旅立っていくのである。

すでに見た *The Paragon* の Lou も Wetherford の出身である。彼の Colfax 家は、新興の Reardon 家と異なって、New England Merchant として19世紀に織物業と鉄道経営に従事した旧家である。一家はかつて大邸宅を誇り、ヨーロッパ大旅行をしたこともあるが、織物、鉄道とも斜陽化して、一家には昔の面影もなく、二世代にわたって浪費家や下手な投資家が出たため、今はすっかり落ちぶれてしまった。いやそれどころか、一家の人々は、先に Lou に言及した際に一言ふれたように、今や奇矯な性格破綻者の集団にすぎない。一家の権威 Aunt Marguerite は30年間酒びたりだし、スポーツ選手という Bill は時々 Hartford の YMCA でゲームをするだけだし、政治家 Philip Colfax Clinger は弗素を水道の水に入れるなど叫んで大統領選挙に打って出て失敗し、次で州議会に出よう

としてこれにも失敗し、結局、田舎の政治家としてもあまりパツとしない。ほんのしばらく田舎の TV に出たことのある Aunt Lydia は、今でもそのプログラムが自分のものであるかのような誇大な言い方をする売れないタレントにすぎない。

Reardon 家と同じく Colfax 家の同族意識も非常に強いが、彼等には創造性が全然ない。Aunt Alice が建てて今は Lou のものとなっている「黒い家」はこの一家の象徴である。この家には電気も電話も水道もない。入ってくる水がない故に出ていく下水の設備もない。「黒い家」は外から入ってくるものを拒み、全く自己の殻にとじこもっている。Colfax 家はこの「黒い家」のごとく一家の殻にとじこもって、新しい創造のないまま、ひたすら奇形化の道をたどってきたのである。

Lou は「おれの親籍は間違いだ。おれは自分も間違いの一人になるかと死ぬほどおそれているんだ。出口を見つけなければならないんだ¹⁴」と叫び、失敗者の群に陥ることを激しく拒否し、伝統的な家の重圧から脱出して、自分の人生を生きることを烈しく求めるのである。

Indian Summer の Cleet にとっては、このように生きることは比較的容易だった。Reardon 家と血のつながりを持たない彼はただ家をとび出すだけでよかった。しかし旧家の一員である Lou にとっては、家長である父の権威を否定し、家の伝統をたち切らなければならない。Lou は父に面と向って父がただ高圧的だけだったという誤を指摘し、「でもそれは本当は貴方の誤ではない。なぜなら、貴方の父は抑圧された殺人狂だったんだ。私は知っています。そしてその父も別種の怪物だったことも疑いなしです。そしてその先もずっとそうでした。だから、誰かが鎖をたち切る意志と頭を持たなければ、とどまるところがないんです¹⁵」と語っている。

この「鎖をたち切る」ことができず、家長の優位や父子相伝が子の側の重荷となって抑圧作用を及ぼした場合が、“The Peeping Tom”の Marowski 家の息子 Paul である。Paul の父は Wetherford の街のことに

活動的で、手先の技術に巧みだった。Paul はその父にあやかって父の名 Paul をついだが、父の才能を自分に見出すことができず、自分に生れた子供に何の価値が伝えられるかと苦しんでいる。自分の子供に母は父や自分と同じく Paul という名を与えたが、Paul はそれには強く反抗して Stanley と名付けた。それは無能感と裏腹になっている彼のせめてもの自己主張だった。

何をやっても巧みに立廻ることができず、母の怒りをかい、妻にもうとまれて孤独に陥った彼にのこされたのは、ひそかに他の家の団欒を垣間見る「のぞき」をたのしむことだけだった。しかし、街の人々は正体不明の男の「のぞき」に不安がり、彼は遂に捕えられて裁判にかけられる。公判の席で彼の状況が明るみに出され、彼は自分の私的世界を人々にさらすという「二度と繰り返されることのない打撃¹⁰」をうける。だが、この徹底的な打撃をうけてはじめて、彼は自分が父の重み故にみずから陥った「わな¹⁰」から解放されるのを感じるのである。

また、“The Reading of the Will” という短篇では、富豪だった父への依頼心から脱出する青年 Christopher Curtin が描かれている。作中には Curtin 家が Wetherford に住んでいるとは明記してないが、Hartford 近辺に住む事業家という設定からして、この作品も Wetherford 物語に加わるとみて差支えなからう。

Christopher は父の急死にあって財産を整理したが、父はすべての資産を何の能力もない母に与え、父の名をついだ兄には親書を遺したけれども、自分には何も遺していないのを知った。彼は、父は何か自分に伝えたいことがあったのに急死してしまってそれが果せなかったのだと考え、兄宛の親書に自分に関することが書いてあるに違いないと信じて、エジプトで入院している兄の許にこの手紙を届ける役をかって出る。父の名をついだ兄は、余りにも活動的で、強情で、衝動的なため、父は細々と忠告を遺したのだった。ところが、はるばるエジプトまで届けた兄宛の親書の中にも

Christopher 宛の父の言葉はなかった。Christopher はそこではじめて、父が自分を一人立ちできる人間とみなしていたことを知るのである。「父は私の必要とするものをすでに私に与え、私のために行ない、私に向かって言っていたのだ。他にもうメッセージはない。事実、私はもうメッセージは必要でないのだ。……私があるだけなのだ。それで充分だ。それで充分でなければならないのだ」¹⁸

New England Merchant はかつてアメリカ経済界を牛耳り、今なおその一角に根強く喰いこんでいる。Knowles は金の量がパーソナリティーの質を変質させることに鋭く注目し、Wetherford の人々の風俗画によってその種々相を描き、偽瞞性、自己中心性、性格破綻、不毛性をえぐり出すのである。そして、その一方では、このような家や伝統、家長などの重荷、また、家長への依頼心から青年が脱出して自己を開放し、自己実現をめざして自分なりの生き方を求めることを描くのである。

Knowles は West Virginia 州の出身だが、New Hampshire 州の Exeter にある Phillip's Exeter Academy という Prep School に学び、その後、先にふれたように Yale 大学をへて Hartford で新聞記者をした。Wetherford 物語とは、上にみたように、New England Merchant に関連する人々に対する彼の批判的観察をあらわすものである。（もちろん、彼の New England 性を考慮する時には、自然に対する態度、あるいは、罪意識・倫理性への着目をも考えなければなるまい）

だが、すでに述べたように、Knowles の関心の比重は青年の生き方の問題に大きく傾いている。この青年の anti-hero 的状況の設定によって、現在までの Wetherford 物語は非常に効果的な場を作りあげてきたのである。しかし、Wetherford の青年は決して敗北者ではない。上にみたように、「出口」を求めて自分なりの人生へと向っていくからである。

Colin Wilson は『敗北の時代』において、現代文学におけるヒーロー

の不在は、現代社会全体にみちている精神的傾向、すなわち、『非重要性』の感覚¹⁹の故だと考え、現代の新しい hero とその hero を生む新しい精神の基盤を探求した。その基盤は Wilson によれば「新しい実存主義²⁰」ということになりそうだ。Knowles は必ずしも「新しい実存主義」を掲げるのではないが、少なくとも彼の Wetherford の青年たちは anti-hero 的状況からの自己開放によって、一種の hero たることをめざすのである。Wilson によれば、「ヒーローとは、発展する必要がある人間、活動範囲をひろめる必要がある人間、のことだ。彼は現状を『受け入れる』ことのできない人間である。彼は、現在の生き方に反対することが、とりもなおさず自由という観念であるような、そういう人間なのだ。そしてアンチ・ヒーローとは、受けいれる人間、『適合する』人間なのである」²¹このヒーローの定義は、そっくりそのまま Wetherford の青年たちにあてはめることができる。

もちろん Wetherford の青年たちに通俗的な勝利が約束されているというのではない。だが、Knowles は青年たちが自己認識を深め、自己への自信を得て生きようとすることに、敗北と絶望と孤独の歯止めを見出している。そして、彼等に hero としてのある歴史的イメージを与えたのである。

Indian Summer の結末で Cleet は Reardon 家を出ていく。彼が向ったのはカンサスだが、カンサスは彼の窮極の土地ではなく、その向うには貨物の航空会社を考えているアラスカがあり、さらにその先には、「自分がやつつけられるかもしれないが、すばらしい人生があるかもしれない」²²のである。たしかにここには American Dream に生きた人々の原形質に近いものがある。だが、Reardon 家を去る時、彼は Connecticut 川に入ってくる帆船の群——Man-of-War, Brigantine, その他の小帆船からなる——が見えるような気がした。「彼が見ていた、ほとんど実際に眼にしていたのは幻だった。それは彼の心を希望で充たすのだった」²³一方、“The

Reading of the Will” の Christopher は父の親書をエジプトまでとどけるのに、飛行機を利用せずにわざわざ船旅をする。さらに、*The Paragon* の Lou は海中の微生物やプランクトンに興味をもち、深海の秘密に人類の食料問題解決の鍵を見出そうとしている。このように、Wetherford の青年たちの未来に、海や船がからんでくることは偶然ではない。Christopher が、その名前もさることながら、New York から乗りこんだ船の名はいみじくも Christoforo Colombo (コロンブスのイタリー名) だった。彼はエジプトまで旅をして、そこではじめて父が自分に何の言葉も何の指図も遺してくれていないのを知った。彼は父からいわば一枚の白紙を遺されたのにも等しく、コロンブスの如く、人生の探険にもとづいて自らの手でその白紙に海図を書きこまねばならないのだ。

Cleet も Lou も全く同様である。彼等とともに『「非重要性」の感覚』を放擲して自らの手で人生の地図を書こうとするのである。先に Lou を引き合いに出して彼を模範 (paragon) と言ったが、Knowles は Wetherford の青年を通して anti-hero 的状況や条件に甘じない hero の誕生、つまり、コロンブスの航海者として人生の探険に出発する模範青年の誕生を描いたのである。

彼等は Salinger の主人公のように神秘的な宗教の世界に入ることもないし、Saul Bellow のピカロ的人物でもない。また、単に逃げ出すことだけを考えているのでもない。Wetherford の青年は自己欺瞞に陥ることなく自己の現実を直視し、そうすることによって自分に対する自信を獲得し、anti-hero 的状況からの「出口」を見出すのである。「私があるだけなのだ。それで充分だ。それで充分でなければならないのだ」とは、探険家としてのヒーローを物語る言葉である。

もちろんこのヒーローの背後には、青年の創造的エネルギーに対する作者 Knowles の無限の信頼が大前提としてある。不条理、疎外など、anti-hero 的前提が支配的な現代の状況からみれば、Knowles のこの信頼はあ

まりにも素朴だと評される余地はあるだろう。はじめに述べた Knowles の評価がまだ定まっていないということの背後には、Knowles が信頼している青年の創造的エネルギーをどう受けとるかということについて、アメリカの読書界、いや社会そのものに、いまだに迷いがあるのではなからうか。それはともかくとして、Knowles が今後どのような形で青年をとらえるか、また、Wetherford 物語をどう展開させるか、注目してみる価値は充分ありそうである。

(1973. 1. 31)

なお、この小論の一部は、1972年11月京都女子大学で開かれた日本アメリカ文学会関西支部大会で発表した。また後半の一部は、『不死鳥』No. 36 (1973年5月10日) (南雲堂) に発表した小論と重複する点がある。

注

- 1) 手許にあるペーパーバックの Bantam Book 版の扉裏の記載によれば、Macmillan 版は 1960年2月の出版以来 11刷を重ね、1966年2月に Bantam Book に入ってから 1969年6月までに 16刷を重ねたとある。邦訳は須山静夫氏の手でなされ、『友だち』と題されて白水社から刊行されている。(1972年8月)
- 2) James L. McDonald, "The Novels of John Knowles," *Arizona Quarterly*, Vol. 23, No. 4 (Winter 1967), p. 342.
- 3) Webster Schott, *The New York Times Book Review*, Jan. 31, 1971 (LXXVI, 5), p. 6.
- 4) *The Paragon* (New York: Random House, 1971), p. 210.
- 5) *Loc. cit.*
- 6) *A Separate Peace* (New York: Bantam Books, 1969), p. 193.
- 7) Lionel Trilling, "Manners, Morals, and the Novel," in *The Liberal Imagination* (Garden City, N. Y.: Doubleday, 1957) (Doubleday Anchor Book), p. 200.
- 8) James L. McDonald, pp. 335 ff.
- 9) James W. Tattleton, *The Novel of Manners in America* (Chapel Hill: The U. of North Carolina Press, 1972), P. 10
- 10) *Indian Summer* (New York: Random House, 1966), p. 107.
- 11) Lionel Trilling, pp. 207-8. Fitzgerald の言葉は、Hemingway の "The

- “Snows of Kilimanjaro”の中で Julian という仮名の人物が言ったことになっている。(*The Short Stories of Ernest Hemingway* (New York: Scribner's Sons, c 1963), p. 72)
- 12) *Indian Summer*, p. 226.
 - 13) *Ibid.*, p. 116.
 - 14) *The Paragon*, p. 92.
 - 15) *Ibid.*, p. 94.
 - 16) “The Peeping Tom,” *Phineas: Six Stories* (New York: Bantam Books, 1969), p. 82.
 - 17) *Loc. cit.*
 - 18) “The Reading of the Will,” *ibid.* p. 147.
 - 19) コリン・ウィルソン, 『敗北の時代』(*The Age of Defeat*), (東京, 新潮社, 昭34), 7頁.
 - 20) 同上書, 168頁.
 - 21) 同上書, 99頁.